

もしも…【東條希生誕 記念】

雷電 p

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

〃もしも…〃

そんなことがあつたら、と希がこれまでのことを振り返りながら考えます。

目次

もしも……【東條希生誕記念】 | 1

もしも……【東條希生誕記念】

もしも、ウチがμ'sに入ってたなら——？

桜の花びらがあたたかな風に乗って空に舞い上がる春の一時。春一番よりも唐突な言葉をあなたから贈られて、ウチはちよっぴり驚いた。

もしも……だなんて、今まで考えたことが無かったかもしれない……。
……ううん、違う。

前に一度だけ、ほんの少しだけ深くはなかったけど、ふと自分で考えてみたことがあった。

あれは、そう、μ'sのみんなで初めての合宿に行った時のこと。

先輩も後輩も禁止にしてみんなとの親睦がより深まったあの夏。

μ'sに入ってたホンマによかったって思ってた時に、ふと頭に過ったことなんよ。

もしも、ウチがμ'sに入っていなかったら——

もしかしたら、えりちと一緒にずっと生徒会をやっていたのかもしれない。

えりちはウチの親友。

ウチが生徒会に入ったのもえりちの影響があったから……と言うよりか、えりちを支援してあげないとあかんなあと思ってた。

えりちは頭もよくなって人望もあるけれど、あの頃の性格はウチが言うのもなんやけど、とつてもキツかったわ。

廃校のことで余裕がなくなつて、毎日イライラした顔をして、生徒会のみんなも近寄りにくかったなあ。

でも、時折見せてくれる子供のようなくしやれた笑顔がとつてもキラキラしてて、ウチの心をときめかせるくらい可愛かったんやで？

それを見たウチは、「ああ、もっとえりちのことを笑顔にしてあげたい」って思うようになって、えりちと一緒に頑張ろうって思ってたんよ。

もしも、μ'sがなかったら——

せやなあ……わからんね。

学校が廃校になるのが決まってしまうんやろうかな？

決まったら、えりち、とつても悲しむかもしれへん……。

そんなえりちをウチは支えてあげられるんやろか？

ホンマに、わからんなあ……。

ん？ 大丈夫やで。心配してくれてありがとな。

ウチがしょんぼりしているように見えたんやろうか、あなたはウチを励まそうと陽気な声をかけてくれた。

その励まし方がちよつぴりぎこちなく見えて思わず、くすつと笑みがこぼれた。

え？ もしも、えりちたちもおらんかったら何をしていたって？

うくん……また難しいことを聞くなあ。

話を変えようと、あなたは押し気味に聞いてきた。

強引やなあ、と思うのやけど、あなたがそう言うならと少し考えてみる。

もしも、えりちもにこつちもいなかったら——

多分、ウチはそれなりに充実した毎日を過ごせていたかもしれない。
友達もつくれていたと思う。

まずは自分の隣の机の子に声をかけておしゃべりする仲間になって、そこから段々その
範囲を広げてたくさんの友達をつくっていたかもしれない。

今までにも友達をつくろうと思っても、親の関係ですぐに転校しちやつて、友達と呼
べる人は誰もおらんかった。

そのせいなのか、すぐ人と仲良くなる処世術は身に付いたけれど、友達の作り方は下
手っぴ。

だから、いくら友達をたくさんつくっても、えりちたちのように心を打ち明けられる
ほどの友達がつくれたかどうかはわからない。

部活動も生徒会も多分入ってはいない。

みんなえりちとにこっちがいたから入ったものだから、自分から何かをやりたいとは
思わなかったのかもしれない。

あるとしたら…：神社のお手伝いくらいかな？

1人暮らしするからね、お母さんたちからの仕送りは来ると思うけど、自分で稼ぐく
らいはしておかないとって思うかもしれない。

そこは今と同じ気持ちかもね。

満足できた生活ができていたかは分からない。

でも、今とはまったく違う環境だったと思うと、なんだか寂しい気持ちになる。

楽しくおしゃべりできる親友。

ひとつのことに全力で取り組める部活動。

笑いあったり、ふざけあったりしてくれる仲間。

今のウチには抱えきれないほどの幸せに囲まれて……、それが全部無くと思うと気持ちが悪くなる。

それくらい、今の生活が充実してて、楽しいと思えるからなんやろうなあ。

——これがウチの考えた答え。

どう、わかってくれたかなあ？

自信ない気持ちで聞いてみると、あなたは、うんわかったよ。ありがとうと言ってくれる。

そか、ありがとな。とウチもつい感謝してしまう。

ウチの話を聞いてくれて、ホンマに嬉しかったんや。

一応言っておくけど、このことはまだ誰にも話したらんよ。

えりちにもこっちにも、ね？

だから、ウチとあなただけのヒミツにしているほしいんよ。いいかなあ？
ちよつぴりにこつちみたいにあざとく聞いてみた。

そしたら、あなたは頬つぺたを紅くさせちやって、少し照れくさそうに、いいよと返してくれた。

ふふつ、あなたのそういうかわい反応が見たかったんやで♪

ちよつといじわるな感じやけど、2人だけのヒミツにして欲しいのはホントのこと。
ウチはあなたのことを信頼してるから内緒の話もできるよ。

あとね——、とふと脳裏に思い浮かんだもうひとつのことをあなたに教えたくて、思わず口走つちやつた。

あなたはさつきと変わらないまま、ウチのことをジツと見つめて聞いてくれる様子だ。

そんなに見つめられちゃうと恥ずかしいなあと思つちやうけど、これはあなたのことだからと言葉を紡ぎ出す。

もしも、μ'sに入っていなかったら——

ウチは、あなたに出会えていなかったのかも……

μ'sは、ウチとあなたが出会ったきっかけ。

ウチのことを応援してくれたあなたと目があつて、運命を感じちやつた。

運命は思いがけない時に来るってよく言うもんやなあ。

初めてあなたと出会った時、ウチは気持ちを隠してたけど、胸の奥ではずっとドキドキしたのを覚えてる。

ウチとあなたとの出会い。

とっても甘酸っぱくって、とってもあたたかな時間やつた。

μ'sがあつたおかげで、今こうしてあなたの隣にいられる。

あなたと出会ってから、楽しい時間がたくさん増えた。

あなたと過ごした数え切れないほどの時間がどれも楽しくて、嬉しくて、尊いものだったか……もう計りきれないわ。

そして、今まで知らなかった感情に気付くことができた。

ねえ、覚えてる？

ウチがあなたに打ち明けた想いを……。

冬のある日に伝えた、二言の言葉を、ね。

ねえ、知ってる？

あれはね、寒い冬の夜。

μ'sのみんなど過ごした夜の出来事。

手の平にこぼれ落ちた、白くて小さな、小さな雪がウチに運んできてくれた想い——

『好き』

『ウチは、あなたのことが、好き……』

あなたに届いてほしいと本気で願った言葉。

白くて凍りそうな息を吐きながら、あなたに打ち明けたウチの想い。

その想いを受け止めるように、あなたはウチのことをギュツと抱きしめてくれた。あつたかくつて、安心してしまうあなたの胸の中でほろりと涙が溢れた。

ウチの想いが、望みが叶ったんやなと思って、つつい涙が止まらんかった。

だから、もしも、μ'sがなかったら……と思うと胸が苦しくなるんよ。

今のウチには、μ'sや仲間たちだけやない。

あなたが隣にいてくれる。

こんなにも幸せに溢れた生活が無くなるだなんて、考えられへんし、なりたいとは思わへん。

あなたはもう、ウチにとってかけがえのない存在なんやで。

……つて、たくさん語ってしもうたな。
なんだか恥ずかしいわ……。

自分からいろいろと話をしてしまつて、思い返すととても恥ずかしい気持ちになる。
顔がかあーつと熱くなつて、少しくらくらしちやいそうや。

えつ……俺も希のことが好きだよ——つてえつ!? そ、そんなつ……まつすぐ見つめ
られて言うやなんて……卑怯やん……。

でも、そう言つてくれることを期待していたところもあつて、正直嬉し過ぎて言葉が
見つからなかった。

それでもあなたにはちゃんと saying おかないとあかんなと思ひ、ありがとな——と照
れくさそうに言つてみた。

するとあなたはとても素直にウチの言葉を受け止めてくれて、微笑んだ様子を見せて
くれた。

そんなあなたを見て、ああ、この人でよかつた——つて嬉しく思える。

あつ、もうそろそろ練習に戻らんと！ またにこつちに叱られてまうなあ。

時計を見て、みんなと約束した時間が過ぎようとしていたから焦った。

ウチら3年生は学校を卒業したけど、まだ μ' sのままている。

そして、その μ' sの最後のライブがあともう少しで始まるうとしているから、今は毎日みんなと練習している。

これで最後なんやなあ、と思うととても寂しくなる。

今のウチを生み出してくれた μ' sは最後のライブを終えると無くなってしまう。

みんなともバラバラになってしまう。

それがとつても悲しくって、寂しい気持ちになる。

でもね、以前と比べたら平気になっている。

離れ離れになつてもウチらはちゃんと繋がっているんやつて信じている。

それに、もうウチはひとりぼっちやない。

ウチのことを支えてくれる、大切な人がすぐ近くにおるんやから……。

ねえ、最後のライブでのウチの姿をちゃんと目に焼き付けてな！

そう言ったら、ああ、もちろんだよ——とあなたはまた微笑んでくれる。

あなたのその顔を見たら、頑張れそうな気がしてきた。

うん、大丈夫。

もう怖くないからね。

前に進んで、みんなのところに向かって駆け始める。

あと、もうひとつ……

今度は、未来に向けてのお話を……。

もしも、あなたがウチの——

f
i
n
:
: